



TITLE:

京大広報 No. 480

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 480. 京大広報 1995, 480: 908-919

ISSUE DATE:

1995-02-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209154>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 480

京都大学広報委員会

## 目次

### <大学の動き>

井村総長, アメリカ

合衆国訪問……………909

平成7年度入学者選抜

学力試験(第2次学

力検査)の志願状況……………909

平成7年度入学者選抜

学力試験の第1段階

選抜状況……………910

平成7年度医療技術短

期大学部入学志願者

状況……………910

京都大学市民講座

「ながれ」講演要旨

(その2)……………911

### <紹介>

農学部林学教室……………913

—京都大学の百年(第6回)—

朝永三十郎の見た京大

の学風……………914

### <資料>

国立大学で受け入れる私費外国人留学

生の在留資格認定証明書交付手続き

の郵送による代理申請に関する国立

大学協会の要望書……………916

日誌……………916

平成7年文学部博物館特別展の開催……………917

### <随想>

三楽覚え書

名誉教授 赤井浩一……………918

### <コラム>

ウィーンと私

高橋幹二……………919



フォールハルトの詩編 (Folchart-Psalter, 872-883) の頭文字 Q: 《Q(uid gloriaris...)》. ザンクト・ガレン修道院図書館所蔵, Cod. Sang. 23, p. 135. —関連記事本文917ページ—

## &lt;大学の動き&gt;

## 井村総長、アメリカ合衆国訪問

井村総長は、日米医学協力委員会出席のため1月25日からアメリカ合衆国に出張し、1月29日帰国した。

本委員会については、文部省を通じ外務省の依頼により委員を務めているものであるが、本委員会出席の機会にアメリカ合衆国側委員と高等教育・学術研究機関における医学の現状等について意見交換を行った。

## 平成7年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査)の志願状況

志願票の受付は、1月23日(月)から2月1日(水)までの間に、各学部で行われた。  
(本年度は阪神大震災のため、2月1日必着から書留速達便に限り同日消印有効とした。)  
学部別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 部		募集人員	志願者数	倍 率	(参考) 平 成 6 年 度		
					募集人員	志願者数	倍 率
総合人間学部	前期「文系」	55 人	210 人	3.8	55 人	309 人	5.6
	〃 「理系」	55	268	4.9	55	301	5.5
	後 期	20	420	21.0	20	318	15.9
文 学 部	前 期	190	725	3.8	190	650	3.4
	後 期	30	442	14.7	30	434	14.5
教 育 学 部	前 期	40	179	4.5	40	163	4.1
	後 期	20	151	7.6	20	144	7.2
法 学 部	前 期	340	1,028	3.0	340	1,072	3.2
	後 期	60	644	10.7	60	663	11.1
経 済 学 部	前期「一般」	160	592	3.7	160	534	3.3
	〃 「論文」	50	324	6.5	50	342	6.8
	後 期	30	520	17.3	30	408	13.6
理 学 部	前 期	294	989	3.4	294	856	2.9
	後 期	32	1,266	39.6	32	1,235	38.6
医 学 部	前 期	90	414	4.6	90	385	4.3
	後 期	10	334	33.4	10	303	30.3
薬 学 部	前 期	70	222	3.2	70	201	2.9
	後 期	10	169	16.9	10	190	19.0
工 学 部	前 期	940	2,729	2.9	947	2,519	2.7
	後 期	110	1,530	13.9	113	1,183	10.5
農 学 部	前 期	252	755	3.0	260	836	3.2
	後 期	63	679	10.8	65	813	12.5
合 計		2,921	14,590	5.0	2,941	13,859	4.7
	前 期	2,536	8,435	3.3	2,551	8,168	3.2
	後 期	385	6,155	16.0	390	5,691	14.6

(注) 法学部(後期日程)と経済学部(後期日程)との募集人員には、「外国学校出身者のための選考」の募集人員20名以内と10名以内とを含む。また、両学部の志願者数には、同選考志願者52名と41名とを含む。

## 平成7年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成7年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月10日（金）、志願者に通知された。学部別の受験予定者数は次表のとおりである。

また、第2次学力検査は同表に記載の試験場で行われる。最終合格者の発表は、3月9日（木）（前期日程試験）と3月23日（木）（後期日程試験）の正午に各学部ごとに行われる予定である。

学 部	日 程	募 集 人 員	受 験 予 定 者 数	第2次学力検査試験場
総 合 人 間 学 部	前期「文系」	55 人	201 人	総 合 人 間 学 部
	〃 「理系」	55	259	〃
	後 期	20	302	〃
文 学 部	前 期	190	665	総 合 人 間 学 部
	後 期	30	282	法 ・ 経 済 学 部
教 育 学 部	前 期	40	159	文 学 部
	後 期	20	144	〃
法 学 部	前 期	340	1,028	法 ・ 経 済 学 部
	後 期	60	546	〃
経 済 学 部	前期「一般」	160	592	総 合 人 間 学 部
	〃 「論文」	50	251	〃
	後 期	30	398	法 ・ 経 済 学 部
理 学 部	前 期	294	960	関 西 文 理 学 院
	後 期	32	1,236	総 合 人 間 学 部
医 学 部	前 期	90	414	医 学 部
	後 期	10	300	〃
薬 学 部	前 期	70	222	薬 学 部
	後 期	10	169	〃
工 学 部	前 期	940	2,722	文, 法・経済, 工学部
	後 期	110	1,527	工 学 部
農 学 部	前 期	252	755	農 学 部
	後 期	63	679	〃
合 計		2,921	13,811	
	前 期	2,536	8,228	
	後 期	385	5,583	

（注）法学部（後期日程）、経済学部（後期日程）の受験予定者数には、「外国学校出身者のための選考」の第1次選考合格者34名と27名を含む。

### 平成7年度医療技術短期大学部 入学志願者状況

平成7年度医療技術短期大学部入学者選抜試験は、3月2日（木）と3日（金）の両日に実施されるが、入学願書の受付が2月1日（水）から7日（火）まで行われた。

学科別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	倍 率
看 護 学 科	80 人	275 人	3.4
衛生技術学科	40	343	8.6
理学療法学科	20	201	10.1
作業療法学科	20	132	6.6
計	160	951	5.9

（医療技術短期大学部）



## 京都大学市民講座「ながれ」

## 講演要旨（その2）

## 黒潮のながれ

—その水はどこから来て、どこへ行くか—

理学部教授 今里 哲久

黒潮の流れは、潮流のように規則正しく周期的に流れの向きを変えることはなく、ほぼ同じ向きに流れている。黒潮は、表層から1,000m深あたりまで達する流れで、その幅は約200km、流軸中心での流速は $150\sim 250\text{cm}\cdot\text{s}^{-1}$ で、強い流れは表層に集中している。黒潮は、日本列島の南岸沿いにはほぼ同じところを流れるが、「川のながれ」とは流れ方が違っている。川のながれは、圧力の高い方から低い方へ流れるが、黒潮はほぼ等圧線に沿って流れる地衡流である。

海の流れを計るには、海面の凹凸や、海水密度の分布を計る間接法と、流速計を設置したり、ブイを流して追跡していく直接法とがある。黒潮の水がどこから来て、どこへ行くのかを知るには、ブイを追跡するラグランジュ的な直接法が適していて、人工衛星を利用したブイの追跡がさかんに行われるようになってきた。

スーパーコンピュータを使ったシミュレーションで全世界海洋の流れの3次元分布を求め、その流れの中に約20万個の標識粒子を投入し、計算機の中の海洋中をこれらの各粒子がたどる道筋を追跡した。その結果によると、トカラ海峡附近を出発した黒潮の水は10～20年の時間をかけて北太平洋を時計回りに一周した後、元へ戻るものと、インドネシア多島海を通過してインド洋を西へ進み、喜望峯沖で一部が別れ南極大陸を周回する流れの北縁を東に流れて南太平洋に入り、南米沖を北上して再び北太平洋へ戻るものがある。残りは、300年を超える頃になると、大西洋にも現れ、ギニア海流、湾流に取り込まれ、北極海やグリーンランドにまで達する。この過程で4,000m以深に達するものも多く、300年位ではほぼ全世界の海に散らばるようになる。逆に、トカラ海峡附近の黒潮の水は、2つのルートを通してやって来る。その1つは北太平洋を1周して戻ってくる黒潮の水

である。今1つは、大西洋やインド洋の水が南極大陸を周回する流れにのって南太平洋の表層に入り、赤道を越えて黒潮に合流するルートである。このように黒潮の水は全世界からやって来て、再び全世界の海へと散って行くが、海水が世界を一周するのに要する時間は3,000年を超えるものと考えられている。

(平成6年10月29日講演)

## ゴールドラッシュと人・物・情報のながれ

—19世紀末・カナダ北部のばあい—

総合人間学部教授 山田 誠

古来、金<sup>きん</sup>は多くの人々をひきつけてきたが、19世紀の北アメリカでは山師の活動がとりわけ活発で、1848年のカリフォルニアでの金の発見とその後の事態を代表例として、ゴールドラッシュが何度も繰り返された。ここで紹介するカナダ北西部でのゴールドラッシュ（金の発見地の名をとって「クロンダイクゴールドラッシュ」という）は、それらの内、19世紀最後、かつ最大級のものである。

カナダ北西端に近いユーコン川の支流クロンダイク川の流域で、アメリカ人G. W. カーマックによって最初に金が発見されたのは、1896年8月16日のことである。しかし、当時のこの地方は交通・通信が未発達で、このニュースがカナダ・アメリカ本土に伝わったのは、金発見から1年近くも経過した1897年7月中旬のことであった。この情報を知った人々はクロンダイク地方へと殺到した。かれらの多くはアラスカ南東部まで船で行き、そこから大量の必要物資を携えて峠を越え、カナダ領に入った。その際の、大きな荷を背にした人々が雪の積もった急な道を一列縦隊で延々と登坂する様子（写真が残っている）は、まさに「ながれ」というにふさわしい。カナダ領に入ってからユーコン川を下ることができたため、それほど難路ではなかったが、しかし川の結氷期間中は水運も利用できない。そのため、金を求めて殺到した人々の内で1897年中にクロンダイク地方に到達できたのは、ごく一部にとどまり、大部

分は1898年春にやっと現地入りできたのであった。かれらは、そこで初めて、カーマックの発見以前から活動していた山師達によって、この地方の大部分の土地に鉱業権が設定されていることを知った。しかし、そうした情報が正しく伝わるのもまた遅れたために、金を求めてクロンダイク地方を目指す人々は1900年ごろまで引きも切らず、その累計は数万人に達した。

クロンダイクゴールドラッシュの情報は、日本へも時を移さず伝わってきた。そのインパクトはかなり強烈であったようで、日本の地理書では、クロンダイクゴールドラッシュの中心都市ドーソンの名が、なかばゴースタウンと化して以後も長く記載されていた。

このような、ゴールドラッシュに伴う人・物・情報のながれは、確かに異常かつ突発的なものであるが、それらは自然環境や、経済・技術の発展段階を含む社会環境などから説明できる現象でもあり、単に北米の歴史地理上の1エピソードという以上の意味をもつ興味深い研究対象である。

(平成6年11月5日講演)

### 災害をもたらすながれ —洪水流・土石流・火砕流—

防災研究所教授 高橋 保

我々の生活している場へ、ながれが突如侵入して来ることによって起こされる災害には種々のものがあるが、ここでは、代表的な原因となっている洪水流、土石流、及び火砕流を取りあげる。水は高さより低きへ、どんなにわずかでも、水位差があるかぎり、ながれることができるが、土石流や火砕流ではどうであろうか。洪水のながれでも、ときには土砂を数パーセント含んでいる場合もあるが、土石流では、水と土砂・石礫とが容積比で、5対1から、場合によっては2対3の割合で混じり合った状態で、1~10m/sといった高速で流れている。また、火砕流では、砂礫が乾燥状態で、数10m/sもの速さで流れることができるのである。砂を手から落として、砂山を作った経験を誰しも持っているが、円錐状の山の斜面が

30°以上の急斜面になって初めて、その表面を砂が流れ落ちるようになる。ところが、雲仙普賢岳の火砕流は、勾配が3°~6°の緩斜面をも通過している。海を渡った火砕流もあると言われている。土石流も3°~4°の地点まで到達している例が多い。すなわち、土石流や火砕流では、その内部で粒子を分散状態に保持して、流れ易くする機構が働いている。大きな石礫からなるタイプの土石流では粒子同士の衝突による反発が重要な役割を演じており、火砕流では粒子自身から突出するガス（主として水蒸気）が上向きの流れを作って粒子を支える作用が重要であると考えられる。

洪水流は水を主体とするながれであり、古くから研究されているので、特性は解明し尽くされているかといえ、そうではない。河道や貯水池等の形状や河床の状態に応じて変化するながれの内部構造には未解明の問題が多々残されているし、堤防が崩れて発生する洪水氾濫災害の予測を的確に行えるようになるまでには、まだ相当の研究が必要である。しかし、家屋が密集する市街地での洪水氾濫流れのシミュレーションも行えるようになってきている。

土石流は、15°以上の急勾配の谷底に溜った土砂・石礫が水流によって侵食されて起こる場合、山崩れの土砂が谷をせき止めて天然ダムを作り、それが決壊して生ずる場合、山崩れがそのまま土石流に変質する場合などによって起こる。それら



中国雲南省蔣家溝で筆者が目撃した土石流

粘性土石流と呼ばれるもので、水と土砂が2:3程度の割合で混じった状態で、3°の緩い勾配の川を毎秒10mぐらいの高速で流れている。現在、防災研究所は中国科学院と、このような土石流解明と災害対策について、共同研究を実施している。



を理想化したモデルでは、発生する土石流の規模や特性をある程度予測できるようになってきており、洪水流同様、氾濫範囲、流速、土砂堆積厚さ等も予測が可能になってきている。

火砕流に関しては、地質学的な事例研究は数多くなされているが、その流動機構や、氾濫・堆積の

予測に関する研究は、やっと緒についた段階であり、基礎的な流路実験や理論的な考察が加えられている。これによって、ながれの下部にある本体部と、その上部の熱風部の土砂濃度や流速の分布形状などのながれの機構が明らかにされつつある。

(平成6年11月5日講演)

## <紹介>

### 農学部林学教室

林学教室は森林経理学講座、森林生態学講座、造園学講座、砂防学講座および林業工学講座の5講座によって編成されている。以下に各講座を紹介しよう。

森林経理学講座では山村社会についての社会学的研究および森林資源・林産物についての経済学的研究を行っている。山村社会の研究においては、大学院生を中心とする林家経営調査等の現地実態調査を毎年実施し、過疎化・高齢化が進行するなかでの森林資源管理のあり方について実証的な研究を進めている。林産物の生産と流通については、特にその消費形態の変化に着目し林産物消費の可能性を探っている。また、近年では森林資源の持つ様々な公益的機能に対する社会的関心が増加し、森林の還元財としての価値、環境財供給を考慮した最適管理計画の研究に対する需要が高まっている。本講座では森林レクリエーションエ

リアの経済的価値評価、森林レクリエーション施設等利用者の意向調査等を進めているところである。

森林生態学講座では、現在4名の教官と16名の大学院生が森林生態系における土壌水や降水による物質循環の様式、樹木個体群、群集の維持機構、さらに分解過程における分解者動物や微生物の役割など多様な生態学的現象や生物を対象として研究を行っている。森林生態系において、樹木が光合成により作り出す有機物を「住み場所や食物資源」として多様な生物群集が形成されている。このように森林生態系の多様な生物群集は、樹木のエネルギーの取り込みと分解者の効率的な養分のリサイクル機構の相互作用の上に維持されている。森林生態系の多様性を反映して、調査森林も海外の熱帯降雨林、照葉樹林（タイ、マレーシア：写真1、中国）、国内の冷温帯林から亜高山帯の針葉樹林、各種の気候条件下の森林と広域にわたっている。本講座では個別的な研究課題を森林生態系の構造や機能の解明に向けて展開している。

造園学講座では開設以来、自然公園から都市公園にいたる諸公園・緑地と庭園に関係する広範な研究がなされてきた。これらの空間の歴史的研究を軸とした原論的研究、公園・緑地およびそれらのシステムをも含む計画論的研究、施工や保全に関わる技術的研究を実施し、多くの成果をあげてきた。

近年は、都市およびその周辺域における地域・地区の景観形成や空間整備を課題として、都市近郊農村・都市市街地を対象に、山地、農地から河川、さらには都市広場、集合住宅地の共用オープンスペースなど、多様なオープンスペースの計画論的研究を生態学的視点と地域社会形成の両視点を中軸に進められている。また、都市計画史のな



写真1 マレーシア・パソ森林保護区での地上30mの樹冠観察用回廊からの樹冠部

かでの公園・緑地やオープンスペースの批判的再検討といった原論的研究も重要課題である。

砂防学講座の研究内容は、社会のニーズを反映して年々広くなってきている。いわゆる砂防、治山の研究に加えて、土石流や鉄砲水のメカニズム、森林水文、斜面の保全（侵食、崩壊、地滑りの防止、緑化）、砂漠緑化、乾燥地など海外での水文調査、活火山などの地形変化のリモートセンシング、火山の火砕流・土石流とそれによる土砂災害の防止の研究などである。

森林水文では、滋賀県南部の田上山地内の桐生試験地に高さ25mのタワーを立てて、森林からの水蒸気、CO<sub>2</sub>の出入りを観測している（写真2）。砂防に関する研究も、自然環境と調和した計画や構造物の開発が主要な課題となっていて、河畔の林、魚、景観などを考慮に入れた流路や、鉄パイプを用いた透過型のダムの開発を行っている。

林業工学講座では、森林資源の利活用の観点から研究を行っている。まず、森林資源生産について森林造成面では、健全で高品質な材を生産・収穫するための選木方法として熟練者と同様の選木ができるようにファジー理論を応用した技術の確立を目指している。また、選木収穫後の森林の成長経過の追跡調査も行っている。機械・作業面では、木材収穫のための機械装置の開発研究と作業への適応試験、また森林作業者に適する労働環境

の評価と作業改善の研究を行っている。そして森林生産基盤の面では、林道・作業道の路線開設の適否を崩壊発生の危険度にもとづいて評価する方法の研究や、切り盛り土工量を

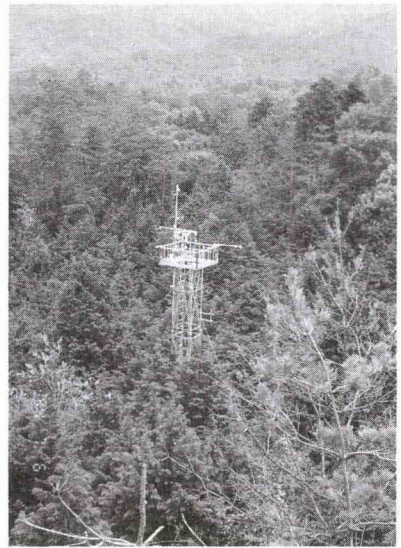


写真2 森林水文観測用のタワー

少なくして作業道の自然環境を守る丸太積み施工の研究を行っている。京大芦生演習林に森林環境調査用架線システムの研究のための架線システムの装置を設定し、森林環境調査を総合的に進めるハード面の支援をしている。

以上が林学教室各講座の紹介であるが、来年度から大学院重点化への改組が始まろうとしており、林学教室の編成も開設以来最も大きな変化の時期を迎えようとしている。

（農学部）

## — 京都大学の百年（第6回） —

### 朝永三十郎の見た京大の学風

京都大学の創立期の頃の教官達は、京都大学の学風の特徴をどのように見ていたのだろうか。朝永三十郎が、京大創立五十周年を記念して草した文章があるので、みてみよう。もっとも朝永が京大に來任したのは明治40年であり、自分が勤務した文科大学（現文学部）のことしか著していないという制約もあるのだが、初期の京大の学風を偲ぶ一つのよすがにはなるであろう。

京大に文科大学ができたのは明治39年であり、最初の教授は狩野亨吉ら6人である。朝永はこの創設期の京大の文科大学の特質を東大との対比で次の三点にまとめている（以下引用は、朝永三十郎「京都大学の思ひ出」『時論』第4巻第6・7号、時論社、昭和24年、適宜読みやすくあらためてある）。

その第一は、古典、とくに東洋古典の尊重と西洋新思想の摂取との両方が目指されたということである。

すなわち「東洋的古典に造詣の深い人々が多く集められた。」「印度哲学の松本文三郎、支那古典の狩



野直喜」「内藤湖南、広く仏教及び和漢の古典に精しい幸田露伴というような人々が極めて短期の間に網羅された。」

「ただしこれと並んでまた、西洋の思想や文芸やについて新しいことに非常に敏感で、率先してそれをわが学界に紹介するということに強い関心をもった哲学の桑木厳翼、文学の上田 敏等の諸氏があり、またアメリカ最新の実験装置を取り入れて新しい実験心理学の研究と指導とに専念せられた松本亦太郎氏等があった。」

「古典尊重と新しいものの摂取との並行は文化を主要対象とする文科大学として当然のことと考えられるのであるが、当時はそれほど明確にその必要が意識され実行されていなかったと思う。」

ここで朝永は、明らかに当時の東京大学の文科大学にはこうした「並行」がなく、その「意識」も「実行」もなかったことを批判しているのである。そして、次のような重要な指摘が行われる。

「この古典と新思想との結合という理念は、私が属する哲学科だけについて言えば、西田哲学というようなものとなって実を結んだのであった。」

古典重視と新思想の積極受容とのブレンドが、西田幾多郎に代表される京都学派の哲学を生んだ一要因として指摘されているわけである。両者の重要性は誰しもよく知っているつもりではあろうが、古典重視は往々にして生きた現実と何のつながりももたない「訓詁学」を生みがちであり、新思想摂取はたんなる「紹介屋」を生み出しがちなこと事実である。まして両者の適正なブレンドは言うほどにやさしいことではない。朝永のこの言は今日でも頂門の一針として受けとめられるべきではないだろうか。自戒とともに著しておきたい。

さて、第二の点について朝永は次のようにいう。「著しく目に立ったことは、学歴や教歴を全然無視して、操觚人（ジャーナリスト）とか文芸人とかの中から思いきって人材を簡拔せんとしたことである。内藤湖南氏や幸田露伴氏の招聘のごとき当時においては非常に型破りのことであった。」

これが、当時としてはいかに「型破り」であったかの証拠として、朝永は内藤湖南招聘にまつわる著名なエピソードを紹介している。すなわち、狩野文科大学長の奔走にもかかわらず、内藤が学校教育の経験のない新聞記者だということでその教授就任に対して文部省の承認が出ず、やむなく2年ほど講師をしてから、ようやく教授となったという経緯である。当時の文部省の閉鎖的な教官人事慣行を批判しつつ、それに対して京大の文科大学が果敢な抵抗を試みるだけの斬新さと気概をもっていたことを朝永はいつているのである。こうした傾向が、後の沢柳事件や滝川事件などの大学の自治をめぐる一連の京大事件を生み出していったとみることもできよう。

「東大の慣例を破った第三の事例として、東大では西洋文学の教授はすべて当該国人に限り、日本人はただ講師として置くということになっていたのであるが、こちら（京大）では教授を日本人として西洋人はただ講師とすることにしたことである。」

これは、お雇い外国人に頼るのではなく、できるだけ日本人自身の手によって西洋学の研究ができるようにならなければいけないという意志の表明であった。今日ではむしろ思い切った外国人の登用の方が課題といえるかもしれない。

以上、1. 古典重視と新思想摂取のブレンドによる清新な学の確立、2. ジャーナリストなど経歴を問わない人材の登用、3. 外国人雇用に関する斬新な施策、の三点を朝永は京大の新学風として総括しているわけである。

朝永が今日の京大を見たら、これらの諸点について何というだろうか。

（百年史編集委員会 筒井清忠）

## &lt;資料&gt;

# 国立大学で受け入れる私費外国人留学生の 在留資格認定証明書交付手続きの郵送による 代理申請に関する国立大学協会の要望書

国立大学協会は、次の要望書を法務大臣等関係方面に提出した。

平成6年12月6日

国立大学協会会長  
吉 川 弘 之

## 国立大学で受け入れる私費外国人留学生の 在留資格認定証明書交付手続きの 郵送による代理申請に関する要望書

周知のとおり、昭和58年中曾根内閣のもとで策定された、いわゆる「21世紀初頭における留学生受入れ10万人計画」の進展に伴い、既に5万人を超える外国人留学生が我が国の大学で学んでいます。そのうち、日本政府の奨学金による国費外国人留学生は約1割弱で、9割を占める留学生は私費によるものであり、今後は一層、私費外国人留学生が増加するものと見込まれています。

さて、現在、私費外国人留学生の留学査証申請については、在外公館における本人の直接申請が事務煩雑及び

極めて長い日数を要することから、日本国内における関係者の在留資格認定証明書交付の代理申請が推奨されています。ところが、当該留学希望者に在日関係者がいるという例外的場合は別として、大部分の場合は、受入れ大学教官（又は職員）が在留資格認定証明書交付の代理申請を法務省（地方入国管理局）に行い、その交付を受けて本人にこれを送付し、在外公館での留学査証を取得させるという形をとっています。

この場合において、代理申請者自らが地方入国管理局に必要書類を持参の上出頭すべきこととされ、郵送による申請は認められていません。このため、私費外国人留学生の受入れのたびに、教官又は職員が直接赴かねばならず、とりわけ大学所在地と地方入国管理局所在地が離れている場合には、毎年、多額の経費及び時間を要し、近時の私費留学生の増加に伴い、もはや対応の限度を超えるに至っています。この状態がこのまま続けば、各大学における私費外国人留学生の受入れの促進は、とてもおぼつかない状況にあります。

しかし、上記「21世紀初頭における留学生受入れ10万人計画」の推進のために、今後、私費留学生の受入れを更に積極的に促進していくことが各方面より強く要請されています。そこで、入国管理局関係者におかれましては、これらの状況及び趣旨をご理解いただき、代理申請の事務簡素化の一環として、又はその特例として、郵送による在留資格認定証明書の交付申請を速やかにお認めいただくよう、強く要望する次第であります。

## 日 誌

(1995年1月1日～1月31日)

1月4日	新年名刺交換会	23日	学位授与式
10日	評議会	24日	評議会
〃	大学院審議会	〃	保健衛生委員会
14日	大学入試センター試験（15日まで）	〃	附属図書館商議会
18日	総長、職員組合との交渉に出席	25日	総長、日米医学協力委員会出席等のためアメリカ合衆国を訪問（29日まで）
〃	国際交流委員会	〃	同和問題委員会
〃	国際交流会館委員会		
19日	環境保全委員会	31日	平成6年度京都大学技術職員研修（第13回）（2月2日まで）
21日	大学入試センター試験追試験（22日まで）		

## 平成 7 年文学部博物館

## 特 別 展 の 開 催

文学部博物館では、下記のとおり特別展「ザンクト・ガレン修道院の文化—写真パネル・複製による資料展示—」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です（職員証または学生証を呈示のこと）。

## 記

期 間 3月8日（水）～3月24日（金）

開館時間 火曜日～土曜日 9：30～16：30  
（入館は閉館30分前まで、日・月・祝日は休館）

場 所 博物館 企画・総合展示室（1F・2F）

## 展示内容

スイス東北部に位置するザンクト・ガレンのベネディクト会修道院は8世紀に起源を遡り、9世紀から11世紀にかけて黄金時代を迎え、学問と芸術の伝統を守り育成することにおいてヨーロッパで最も重要な修道院の一つとなりました。とりわけ写本の製作と収蔵で有名です。その後、16世紀から18世紀にかけて第二の繁栄時代に、バロック様式の修道院聖堂と修道院図書館が建造され、現存するこれらの建築群は修道院建築史上の傑作として、1983年にユネスコの世界文化財に指定されました。

本展は、ザンクト・ガレン修道院文書館長ヴェルナー・フォークラー博士が企画・構成し、1990年以来、欧米各地で開催され、好評を博した巡回展の一環として日本で開催されるものです。中世初期およびバロック期に輝かしかったザンクト・ガレン修道院の文化活動の歴史を、その初めから1805年の修道院組織の解体に至るまで、66枚の大型パネルを中心に、写本ファクシミリ、象牙彫の石膏複製、建築模型などを加えて通観しようとするものです。展示会のハイライトは、中世の写本画の拡大スライド・パネルによる展示であり、我が国においてはあまり知られていないヨーロッパの中世絵画を知る絶好の機会となるでしょう。

なお、1階総合展示室では考古常設展示「日本古代文化の展開と東アジア」を行っています。

（文学部）





